

奥多摩湖南岸・三頭山北西面の大規模地すべり Large landslide in the northwestern face of Mount Mitou, west Tokyo

苅谷 愛彦^{1*}, 清水長正², 澤部 孝一郎³, 目代 邦康⁴, 佐藤 剛⁵
Yoshihiko Kariya^{1*}, SHIMIZU, Chousei², Koichiro Sawabe³, Kuniyasu Mokudai⁴, Go Sato⁵

¹ 専修大学, ² 駒澤大学, ³ 専修大学大学院, ⁴ 自然保護助成基金, ⁵ 帝京平成大学

¹Senshu University, ²Komazawa University, ³Graduate School of Senshu University, ⁴Pronatura Japan, ⁵Teikyo Heisei University

奥多摩湖周辺の多摩川上流域には、堆積岩類からなる急峻な山地が分布する。同地域は岩盤の重力変形や大規模地すべりの発生に適う条件下にあると考えられる。本研究では、三頭山北西面の大規模地すべりについて地形・地質特性を明らかにした。

三頭山北西面の玉川流域にはジグソー・クラックが発達し、地表に流れ山を伴う角礫層（推定体積： $2 \times 10^6 \text{m}^3$ ）が分布する。本層は、主分布域の南方にある凹型急斜面を発生域とする大規模地すべり堆積物である。また本層は玉川を埋積し、堰き止め性の狭小な湖沼・氾濫原を出現させたと考えられる。その発生年代は湖沼・氾濫原堆積物の¹⁴C年代から1292 - 1399 cal AD以前と推定される。一方、これより新しい年代を示す木片も角礫層に含まれることから、同地の地すべりは2回以上発生した可能性がある。地元（山梨県小菅村）での聞き取り調査から、地すべり性堰き止め湖沼の破堤（または二次地すべり）と、それによる土石流の発生を喩えた伝説の存在も明らかになった。